

海域の概要

本湾は、北部を若狭湾に開いた内湾です。湾内には、日本三景の一つである天橋立があります。長さ3 km以上のこの砂嘴によって、宮津湾から阿蘇海が隔てられています。



Specification

諸元

湾口幅：2.5 km

面積：2,608 km²

湾内最大水深：3.0 m

湾口最大水深：3.0 m

閉鎖度指標：2.04

備考：環境基準類型指定水域

Location

範囲または位置

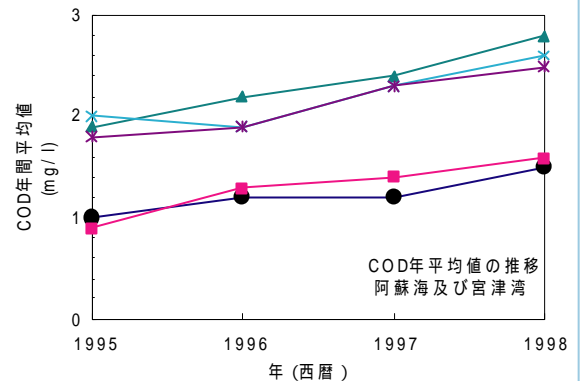
京都府宮津市黒崎と同市波見崎を結ぶ線及び陸岸により囲まれた海域。



環境

下水道整備が遅れたため阿蘇海に流入する野田川の水質悪化にともない阿蘇海や天橋立をはさむ宮津湾でも水質悪化が進んでいます。COD 年平均値では阿蘇海で 2~3mg/l、宮津湾で 1~1.5mg/l で、年々高い値を示す傾向にあります。

底質は阿蘇海、宮津湾とも泥質となっていますが、宮津湾東岸の海岸線付近には岩礁となっています。



自然

阿蘇海と宮津湾を隔てる天橋立は、宮津湾の西南奥に発達した白砂青松の砂洲で日本三景の一つとなっており、若狭湾国定公園に指定されるとともに京都府立天橋立公園にも指定されています。

宮津湾の北西岸には、アマモ場が広がり、対岸の南東岸の岩礁部には、ガラモ場も分布しています。

阿蘇海は、波が穏やかで、カモ類の絶好の越冬地となっています。野田川河口には砂地の中州があり、ウミネコ、セグロカモメ、ユリカモメなどの群れや、コハクチョウの京都府下唯一の定期的渡来地ともなっています。

また、大天橋・小天橋には約 5000 本のクロマツが茂り、ハマユウも自生しています。この付近は、天橋立をはじめ、見どころの多い丹後きっての景勝地となっています。



天橋立

文化歴史

天橋立は、「丹後国風土記」ではイザナギノミコトが天に通う梯子が倒れて橋立になったと記されており、平安期より都人の憧れの地で、和泉式部・小式部内侍・曾根好忠らの和歌をはじめ、多くの文芸・美術に描かれています。16 世紀初頭の作とされる雪舟の「天橋立図」では、砂洲南端と対岸の智恩寺との間に開けた水路がみえますが、江戸中期には橋立の先端がのび、この水路が狭くなり、阿蘇海が閉鎖寸前となったため、橋立切断をめぐる訴訟が数度にわたり起こされました。天橋立の景観は、古来「橋立三大観」(大内峠・栗田峠・傘松公園)が有名ですが、その山麓にある玄妙遊園は、当地を訪れた足利義満のために、守護一色満範が建てた客殿の跡にあたり、義満が橋立の眺望を「宇宙の玄妙」と讃えたのに由来し、昇天する龍の姿を思わせるので「飛龍観」と称しています。

産業

宮津市は、京都府における水産関係の行政・研究・教育の拠点としての役割を果たし、水産業が盛んなほか、天橋立を核とする観光業にも力を入れています。

水産業では、延縄、桁網、採貝藻などの漁業が営まれ、タイ類、ナマコ、貝類、海藻類などが水揚げされ、近年は、阿蘇海への水道を利用したトリガイ栽培漁業の定着・促進やアカアマダイの種苗生産等を推進しています。また、阿蘇海で漁獲される「金太郎イワシ」は、丸々と太り、脂もあり、名物として知られています。



アカアマダイの稚魚